モンゴルの女性史家E.チメッドツェレンの履歴と著作リスト

今岡良子

はじめに

ウランバートルの中心に「持続可能な発展のためのジェンダーセンター」[1]という名前のNGOがありました。当時、その職員をしていたエネビシが、モンゴルの女性史家チメッドツェレンさんに関する論文を本棚に見つけました。チメッドツェレンは、モンゴル人民革命党からモンゴルの女性解放史を本にまとめる任務を受けた研究者で、エネビシはモンゴル国立大学の院生の時に、チメッドツェレンの著書『モンゴル人民共和国における女性解放の歴史』を日本語に訳した人でした。エネビシが見つけたのは、「歴史家 E.チメッドツェレンの履歴（1924年～98年）」という題名の論文でした。ただ、表紙もなく、ファイルをプリントアウトした中身だけがホッチキスで止められた状態で、誰がそこに置いたのか、誰のものかわかりませんでした。大阪大学外国語学部のモンゴル人教員を通じて、モンゴル国立大学に問い合わせたら、2000年にオユンツェツェグという外部の人が修士論文として書き、歴史学専攻に提出したということがわかりました。論文を読んでも、なぜ、オユンツェツェグという人が、チメッドツェレンに興味をもち、修士論文を書こうと思ったのか、書かれていません。モンゴルでは書いたものを保存する習慣がなく、保存したものも容易に見せてくれないので、文献研究が容易ではありません。むしろ、時間をかけて人間関係を作って、人を訪ね歩いた方がスムーズにいくでしょう。オユンツェツェグという人がなぜチメッドツェレンについて書いたのか、大学関係者が時間的な余裕のある時に訪ねてみたいと思います。

私自身は、チメッドツェレンの書いた女性解放史をまとめる上で[2]、オユンツェツェグの論文から新しく発見したことがありました。チメッドツェレンは自分の著書の中で自分のことをまったく書いていませんでした。オユンツェツェグは、論文の中で、たとえば、

「チメッドツェレンは我が国の中等教育からモンゴル国立大学まで40年以上の教鞭をとり、数千人の学生や生徒に科学の深い知識を教えた歴史家である」、「モンゴルの女性の歴史をテーマに学術的に広い視野の研究を行い、著作を残した唯一の研究者である」、「女性史だけでも著書が4冊、論文が20本、啓蒙宣伝文書を12本書き、学術・理論・実践に関する会議に8度出席し、女性に関する国際的な会議などに代表として出席した」と書いています。

---

[1] 持続可能な発展のためのジェンダーセンターについては、こちらを参照してください。T.エネビシ、今岡良子「モンゴルにおけるジェンダーセンターの現在－持続可能な発展のためのジェンダーセンター代表T．アムガランさんに聞く」、「アジア女性現代史」第4号、2008

[2] チメッドツェレンの『モンゴル人民共和国における女性解放の歴史』についてはこちらを参照してください。今岡著「モンゴル人民共和国の女性解放の歴史－非資本主義的発展論の限界点」、大阪外国語大学女性研究者ネットワーク、『女性の性と生』、嵯峨野書院、1996

このように、これまで知ることができなかったチメッドツェレンの履歴と著作リストをここに翻訳しておきたいと思います。

1. チメッドツェレンの略歴

チメッドツェレンは1924年にドルノド県ダシバルバル郡フフブルでエルチンボーの長女として生まれた。10才まで両親の下で育てられ、1934年に隣のバヤンドン郡の小学校に入学し、1936年にドルノド県の中心地の中学に入学し、1940年に卒業した。1940年から41年にかけて首都ウランバートルの師範学校で学び、中等学校の読み書き教員となった。1949年にはモンゴル国立大学に入学、在学中、最優秀の成績をおさめたのでKh.チョイバルサン元帥から特別給与が与えられた。1953年に歴史の専門教科をすべて履修したので、国家試験委員会の1953年7月1日の決定により中学校の歴史の教師の資格を与えられ、卒業した。1953年7月1日から54年1月18日までモンゴル人民革命党中央委員会で幹部として働いていた。1954年から44年間大学で教鞭をとった。1957年から1962年にかけて中国の北京大学の修士課程で学び、モンゴルの歴史文書『隣国を伝えた記述』という本からタタールに関する本をモンゴル語に訳した。

1974年から78年1月まで大学付属社会科学指導部の書記長となった。入党後、ほぼ連続して党幹部として選ばれ、1972年から74年にはモンゴル国立大学社会科学学部内の党書記長として選ばれた。また、1955年にインドで平和委員会、1965年にフィンランドで世界平和大会、1969年にはベトナムで女性代表として、1974年にはブルガリア共和国で国際学生指導に関する委員会で代表として参加した。1972年にはイギリスの大学でモンゴルの歴史と言語を教えた。

E.チメッドツェレンは、1936年に革命青年同盟、1941年に労働組合、1947年に革命党に入党した。

教鞭をとっている間、政府から勤続40年記念、50年記念の表彰、勤労者の表彰を受け、1973年には準教授となった。1981年には人民啓蒙第一人者、1982年には北極星賞、1997年にはモンゴル国立大学名誉教授となった。

＜訳者解説＞

チメッドツェレンは、1924年に生まれたと書かれています。1921年の人民革命で清朝から独立し、24年にモンゴル人民革命党は共和国宣言をします。男女平等で近代国家を建設することを宣言した憲法が定められたこの年に、チメッドツェレンは生まれました。その後、義務教育、高等教育を受け、知識人として生きる条件が社会的に整えられていく中で、自分の役割を果たしていくことになります。チメッドツェレンは1998年に亡くなったと書かれています。モンゴルは、1990年に民主化、1991年に市場経済へ移行し、1996年から新自由主義路線に入ります。体制転換の混乱の最中に人生を終えたことになります。彼女の人生そのものにおもしろさを覚えます。以下、オユンツェツェグの書いた履歴から興味を感じた点を書いていくことにします。

チメッドツェレンの生まれたドルノド県はモンゴルの最も東、中国国境と境を接する県

です。ダシバルバル郡、バヤンドン郡は、モンゴル民族のマジョリティーであるハルハ族より少数民族のボリアド（ロシア語表記ではブリアート）族が多数住む地域です。つまり、チメッドツェレンもボリアド族であることがわかりました。ボリアド族は、ハルハ族により、1930年代に粛正という暗黒の時代を背負わされた時期があります。しかし、彼女は党の政策に誠実に従って、ハルハ族の女性史をまとめたのでした。

また、チメッドツェレンが親から離れて寮に入った中学生の頃、1939年に日本・満州軍とモンゴル・ロシア軍がドルノド県と満州国との境で衝突しました。30万人の関東軍が攻めて来る。当時のモンゴルの男性人口が、こどもや元僧侶も入れて、わずか30万人。スターリンは当時の最新兵器をモンゴルに投入したと言われますから、地上や上空をソ連の軍隊が通過する音も聞いたでしょう。さぞ、恐かっただろうと思います。今でも、ドルノド県東部には日本軍が落とした爆弾の跡に沢山の記念碑が立てられています。チメッドツェレンは著書の中で、このハルハ河戦争（ノモンハン事件）について書いていますが、歴史学研究者としての客観的な文章で、党の指導の下で書かれた内容です。ハルハ河戦争の時、中学生だったという経験をどこかに言葉にしてはいないか、家族に語ってはいないか、と興味を持ちました。

チメッドツェレンは、1957年から北京大学に留学します。それはモンゴルが中国と仲が良かった短期間の蜜月時代のことです。モンゴル人民革命党の要人も、中国出身者と結婚することは普通にありました。北京での留学生活の中で、中国人の友人もたくさんできたと思います。中国語とロシア語、両方とも自由に使いこなせる研究者はモンゴルでは少なく、彼女の留学が中ソ対立前だったから身につけることができたのだろうと思います。著書では満州語文献も翻訳しているので、語学の才能豊かな研究者が育つ時代でもあったのだろうと思います。その後、中ソ対立が激しくなると、チメッドツェレンの故郷のドルノド県には中国との戦争に備えて、ソ連空軍、陸軍の基地が建設されていきます。ドルノド県は、モンゴル最東に位置し、少数民族がマジョリティーで、中国と隣接し、モンゴル人民革命党政府とソ連の統治が直接入ってくる、日本の沖縄のような存在でした。ゴルバチョフのウラジオストック宣言をきっかけにソ連軍は撤退しますが、今も、建物などのコンクリートと鉄の残骸が草原にこつ然と現れます。ウランバートルで党幹部の職務についていても、2か月の夏休みはたいてい帰郷します。変わっていく故郷の大地をどう見ていたのだろうか？その先の中国国境の向こうには中モ蜜月時代の友人が生きている。軍事化される国境の故郷から分断された中国人の友人たちとの連帯意識はどうなっていったのでしょうか？

そして、今は、ドルノドには世界最大のポテンシャルと誇られる国家戦略ウラン鉱山が3つ集中し、国際的な核廃棄物処分場建設の候補地として名前があげられます。もし、チメッドツェレンが生きていたら、民主化された今、どうしているだろうか、と興味をもちました。

チメッドツェレンは、1969年にベトナムでの会議に参加したようです。その後、テレビやラジオに数回出演し、アメリカの帝国主義の犠牲となる子どもたち、敢然と闘う女性たちについて話したと書かれています。

ベトナムとモンゴルは、地理的に遠いイメージがあるかもしれません。モンゴルは2番目の社会主義国で、ソ連にとっては、資本主義の段階を経なくても、先進社会主義国が資

本や技術面で支援すれば、社会主義国に移行することのできるモデルとして弟分の国でした。アジア・アフリカの社会主義をめざす国にとって、モンゴルは先輩にあたり、ベトナムからモンゴルでモンゴル語とロシア語を学ぶ留学生も少なくありませんでした。

ベトナム戦争の時、モンゴル映画公社のドキュメンタリー映画製作者たちは、しばしばベトナムに入り、アメリカの帝国主義と闘うベトナム民衆を支援するための作品を作り、TV で放映しました。遊牧民は羊、牛、馬など、軍事用に供出し、労働者は1日の賃金を支援にまわし、ベトナム人民を支援したと語るのは 50 代以上で、記憶は鮮明です。ホーチミンもモンゴルを訪問し、モンゴル人民の支援に感謝を述べました。チメッドツェレンは、自分の目で見たベトナム戦争を、どのような言葉で語り、モンゴルの人びとに伝えようとしたのだろうか。どのようにベトナムの女性たちを励まそうとしたのだろうか。TV 番組は、フィルムやカセットの貴重な時代なので、録画を残さず、もう見ることができませんが、党の新聞ウネン紙の 60 年代のものが状態よく保存されていたら、記事を読めるかもしれません。チメッドツェレンは、当時 45 歳なので、母の話を子どもが覚えていないだろうか。家族に会って話を聞きたいと思いました。

チメッドツェレンの略歴を見る限り、党によって就職先と身分が保障され、努力すれば党に評価された人生が見えます。私がチミッドツェレンの書いた著書を紹介したことを本人に伝えてくれた人の話では、自分の著作について「当時は、そう書くしかなかったのよ」と笑っていたと言います。本人に会うことができたならば、もう少し、素顔がわかる略歴を記して残すことができたのではないか、と残念に思います。

2. 著作リスト

チメッドツェレンの著作リストを以下に訳しました。

(1)　著書

①『隣国を伝えた記述』の『タタール』2.5 巻　を中国語からモンゴル語に翻訳し、前書きと解説を書く。1962 年（修士論文）

②『モンゴル女性たち、新しい生活の道に』1966 年、ウランバートル

③『モンゴル人民共和国における女性解放の歴史』1973 年、ウランバートル

④「モンゴル女性の意識に現れた変化」について、『モンゴル人民共和国における女性の諸問題を解決する歴史的経験』1975 年、ウランバートル、17-25 ページ

⑤「毛沢東の思想と毛沢東主義者」『歴史のある証拠文書』1974 年、ウランバートル、113-115 ページ

⑥『モンゴルの女性たちの考え方に関する伝統と革新の諸問題』1983 年、ウランバートル

⑦『モンゴル人民共和国の歴史の特殊な用語・専門用語』編集、1987 年、人民教育省

(2) 学術論文

①「封建領主の財産を没収した歴史より」モンゴル国立大学学術叢書 XI 巻、1967 年、No.1

②「モンゴルの女性たちが新しい生活に目覚め」モンゴル国立大学学術叢書 XI 巻 No.1
③「モンゴル人民共和国の女性の権利を満たす諸問題」『十月革命とモンゴルの国』1969年、ウランバートル
④「人民政府が女性たちの平等な権利を満たすために行った政策」「人民の国」紙 1969 年
⑤「V.I.レーニンはモンゴル人民の友人であり、師である」「科学的な生活」紙、1970 年、No.2
⑥「モンゴルの女性を解放することは、モンゴル人民共和国を非資本主義的発展の道に進めるための 1 つの方策である」「歴史学研究所紀要」、1970 年、ウランバートル
⑦V.I.レーニン「モンゴル革命家に与えた助言、その歴史的意義」モンゴル国立大学紀要、1970 年
⑧「V.I.レーニンの勤労女性を解放する思想をモンゴル人民革命党が実践」モンゴル国立大学、1971 年
⑨「モンゴル人民共和国の社会主義建設とモンゴルの女性」モンゴル国立大学叢書、1972年、No.1
⑩「モンゴルの人民革命とモンゴル人女性」「科学的な生活」紙、1972 年、No.1
⑪「社会経済の発展の中でモンゴルの女性に現れた変化」、"Роль кочевых народов в цивилизации Центральной Азий" 1974 年、ウランバートル、P.P.333-337
⑫「モンゴルの封建領主の民族に対する裏切りについての新しい証拠」、「モンゴル人民革命党歴史研究」1974 年、No.10、P.P.140-144

(3) 学術会議で行った報告
①「封建領主の財産を没収し、階級を一掃したこと」社会科学学部教員による学術会議、1966 年
②「ウランバートルにおける国際学術会議で『モンゴル人民共和国における女性の権利を満たし、解放する問題を決定したこと』、1971 年
③「モンゴルの女性の意識における変革についての諸問題」大学間学術会議、1977 年 10 月 11、12 日
④「モンゴル・ソ連の女性の姉妹友好の発展」社会科学研究所、モンゴル女性委員会が組織した学術会議、1979 年 2 月 7 日。
⑤「ハルハ河で日本の軍国主義者に勝利したことはモンゴルの全人民の勝利である」モンゴル国立大学教員による学術会議、1979 年
⑥「モンゴル人民共和国宣言、その歴史的意義」モンゴル国立大学教員による学術会議
⑦「モンゴルの女性の経済的文化的ないくつかの問題」大学教員による学術会議、1987 年 3 月
⑧「ソ連の女性団体からモンゴルの女性運動の発生と発展のために行った支援」社会科学学部教員による学術会議、1987 年
⑨「歴史学学科の歴史」社会科学学教員による学術会議、1987 年
⑩「モンゴルの 1 人の女性の 2 つの社会での生活」第 5 回国際モンゴル学学者大会、1987 年 9 月

(4) 学術活動

専門外の研究者の執筆活動をサポートする仕事など、ここでは省略する。

(5) 啓蒙活動

①「革命初期のモンゴル女性たち」、「女性」紙、1970 年、No.3
②「人民革命に参加したモンゴルの女性たち」、「ウネン」紙、1968 年 7 月 10 号
③「社会主義社会の平等の権利を保障する政党」、「ウネン」、1988 年、No.17
④「誇るべきモンゴルの国」、「ウランバートル情報」紙、1963 年
⑤「ソ連人民の物質的文化的発展」、1976 年
⑥「ベトナムの子どもたちがアメリカの侵略者に抵抗する闘いに」というテーマでテレビとラジオに出演、1969 年
⑦「ベトナム人民共和国の子どもたちの暮らし」についてラジオに出演、1969 年
⑧「ベトナムの勇敢な人民の果敢な闘い」ラジオに出演、1969 年
⑨「ベトナムの女性たち、アメリカの帝国主義に抵抗する重要な力となっている」、モンゴル人民革命党中央委員会女性部で講義
⑩「モンゴル人民共和国の歴史概要」について外国語で講義し、ラジオで放送
⑪「モンゴル人民共和国の勤労者女性を解放する V.I. レーニンの思想を実践」、「ウネン」紙、1970 年 3 月 7 日
⑫「13 世紀から 14 世紀のモンゴルの歴史の問題点」について、人民軍省の将校の前で講義を行った。1970 年 10 月。
⑬「V.I. レーニン、国際婦人デー50 周年記念」、「ウネン」紙、1971 年 3 月 4 日
⑭「モンゴルの封建制の崩壊について」軍隊 013 部隊の歴史教員の前で講義。
⑮「モンゴルの女性が人民革命で果たした役割」、女性委員会で講義。1971 年 7 月
⑯「革命によって解放された」、'Новости Монголии'紙、1972 年 3 月 7 日
⑰「モンゴルの女性たちの築いた 50 年」、「女性たち」誌
⑱ベトナム人民紙'Tu-Nyat'に「モンゴルの人民はベトナム人民とともに」を寄稿。1969 年、No.838

おわりに

チメッドツェレンのおつれあいは亡くなりましたが、子どもが 1 人健在であると聞きました。ボリアド族女性の歴史、日本とソ連、中国とのかかわりで軍事化されたドルノド県の人々の歴史、中国、ベトナムや世界の女性たちとの連帯について、一度、お会いして、お母さんがつぶやいたことを聞いてみたいと思います。